

パーキンソン病共同研究を行って



依田 麻里

訪問看護を始めて半年が過ぎた頃でした。パーキンソン病と軽度の認知症があり、社会資源の活用を拒否される方を受け持ちました。内服ができておらず、薬を定時に確実に飲んで頂く為に試行錯誤の連続でした。先輩看護師の知恵も借り、訪問看護回数を増やしたり、在宅医師と薬(貼布薬の導入)の相談、休日は家族の協力も得て最終的にヘルパーを導入しました。この事から、本人と家族、医療、福祉と様々な職種の連携により在宅での生活が成り立っている事を肌で感じました。また、訪問看護師が調整役となり家での生活を支えていく、訪問看護師のやりがいを感じられた一例でした。訪問看護の実際として発表した事で、薬を処方する医師から驚きの声が聞かれました。「事件は、現場で起こっている」と思えるぐらい同じ事例はありません。医療・福祉の架け橋となれるよう訪問看護師として努力していきます。